



一般社団法人日本母性看護学会の

近未来から将来へ

一般社団法人日本母性看護学会 理事長 森 恵美

日本母性看護学会の社員の皆様、関係者の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。(社)日本母性看護学会の理事長を拝命しております、森恵美でございます。

本学会も本年度で18年目となり20周年の節目を迎えるにあたり、将来に向けての構想を理事会の皆様と検討することになっておりますが、現時点での理事長としての考えをお示ししたいと思います。

少子高齢化社会が確実に進展し、人口減少社会となり、2025年問題が大きくクローズアップされております。少子化は将来の母親となる人口の減少ですが、産む世代は10代から50代と幅広くなり、母親の年齢のピークは30～35歳となっております。母性看護の対象者は女性、母子、家族であり、社会背景も複雑化し、身体的ハイリスク者だけでなく心理社会的側面も含めてハイリスク者が多様となっております。また、看護を必要とする対象者の嗜好や価値観も多様であり、人権や価値観を尊重したケア実践とは何か問われる時代となっております。このような背景のもと、周産期看護の課題や女性の健康に関する課題は幅広く、複雑化しており、母性看護学の実践知や研究成果の集積、並びにそれらに対応できる看護職者の実践能力の向上が求められているといえましょう。したがって、本学会の今後の役割は、上記のような健康問題の解決に寄与する研究成果の発信、女性・母子・家族中心の看護を展開する上で必要な科学的知識（エビデンス）の集積、それらの実践適用、教育への適用による

社会貢献を進めることにあると思います。一例をあげますと、昔から健康問題であった産後うつ病は近年更に注目されるようになり、政策的対応や、関連学会によるガイドラインの検討がされております。このガイドラインの活用者は助産師等の母性看護学領域の実践者であるでしょう。ガイドラインでは具体的援助が記述されておきませんので、本学会は一般社団法人として、このガイドラインを現場適用する上で学術的な側面から、看護実践家の実践能力育成を支援できると考えております。

本学会はこれまで若手教育研究者の育成、母性看護専門看護師や助産師等の実践能力育成については力を注いでまいりました。本学会の強みは、①母性看護学の実践知、研究成果を確実に輩出していること、②母性看護学の教育研究者と高度実践家である母性看護専門看護師が連携協働する基盤ができあがりつつあることだと考えます。一方、本学会の弱みは、他の専門領域との学術的な連携・協働、国際的な連携、一般市民への社会貢献ではないでしょうか。将来的には強みを活かし、弱みを克服し、研究・教育・実践の有機的連携を強めて、学会活動を活発化させて、学術的な社会貢献をしていきたいと思ひます。このためには人材、資金が不足していますし、具体的な活動と組織化を進める必要があります。今年一年は、将来構想委員会で将来構想を十分に検討し、20周年に向けて組織化、人材育成、効果的資金運用をしていきたいと思ひます。是非とも、社員並びに関係者の皆様のご理解とご協力、お力添えをよろしくお願ひ申し上げます。

第18回日本母性看護学会学術集会報告

学術集会長 松原 まなみ (聖マリア学院大学)



平成28年6月18日(土)、第18回日本母性看護学会学術集会を久留米の地で開催いたしました。会場となる石橋文化センターは石橋美術館をはじめ花と緑にあふれる庭園を備えた複合文化施設で、学術集会プログラムの合間に園内散策を楽しんでいただいた方も多かったようです。

学会参加者総数は638名、初めての試みとして学会前日にプレコンgressを開催しました。プレコンgressとの両日参加者は245名(42.9%)でした。1999年に日本母性看護学会が設立されて以来、九州地区で初めての学術集会開催でしたが、地区別にみた参加者の内訳は九州・沖縄地区が217名(38.0%)を占め、北海道から沖縄まで全国から多数のご参加をいただきました。母性看護学会は教育機関所属の会員が多いのですが、本大会では病院・クリニックからの参加者が283名(50%)と、半数を占めており、教育をテーマとした学術集会でしたが臨床の方々の関心も高かったと言えます。特別企画の3講演のほか、発表演題は67演題(口演34,示説33)と、過去最高の演題数を稼ぐことができました。

学術集会のテーマは「母性看護学教育再考～あらためて考えよう! どう教える?!母性看護学～」としました。看護基礎教育の大学化の進行、助産教育課程の多様化といった看護教育の変化、少子化の進行に伴う分娩数の減少など、産科医療の状況が助産教育に影響を及ぼし、母性看護学教育においても新たな教育展開が迫られています。そのような中で、本学術集会では母性看護学教育の展開を基軸にプログラムを企画し、教育講演では「教えることの基本となるもの～臨床の知としての教育技術の獲得」として、看護教員や臨床指導者の

研修活動に全国を駆け巡っておられる目黒悟先生に、教育学の立場から看護教育への提言をいただきました。また、本学会監事であり、長年、母子関係や母性の心理に関する研究を続けてこられた新道幸恵先生には「『周産期の親子関係形成』の教育について考える」と題して基調講演をいただきました。

本学会は母性看護の上級実践の追求を趣旨としていることから、シンポジウムでは「周産期ハイリスクケアをいつ、どこで学ぶのか?!」と題して母体胎児集中ケア、産科救急、社会的ハイリスク、胎児異常など、高度な対応を必要とする複雑な問題を抱えた妊産婦へのケアについて、実践的見地から教育への課題を提案いただきました。



当日アンケートには162名からご回答をいただき(回収率25.1%)、「教育再考というテーマだったので、期待して2日間参加させて頂きました。」「興味深いテーマが多く楽しく参加させて頂きました。」「“母性看護”をどう学んでもらうか、改めて考えさせられました。」「“学び”を考える機会を頂きありがとうございました。」「様々な視点からの発表で、大変充実した1日となりました」などの評価をいただきました。

午後はシンポジウムとCNS実践報告、一般演題と示説発表などの企画が並行しており、第1～5会場に参加者が分散し、「プログラムが濃厚で聞きたい講演やシンポジウムと口演が重なってしまい、どちらか選ばなければならず残念です。」「もりだくさんの内容だったので、学術集会を2日間にすると思う。」などの意見もいただき、今後の検討課題とさせて頂きたいと思っております。以下に

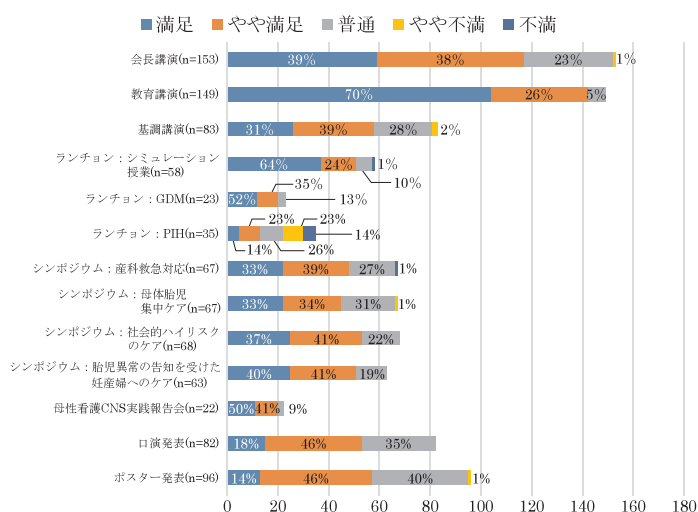


アンケート集計結果の一部を掲載させていただきます（全体の結果は第18回日本母性看護学会学術集会HPに掲載）。

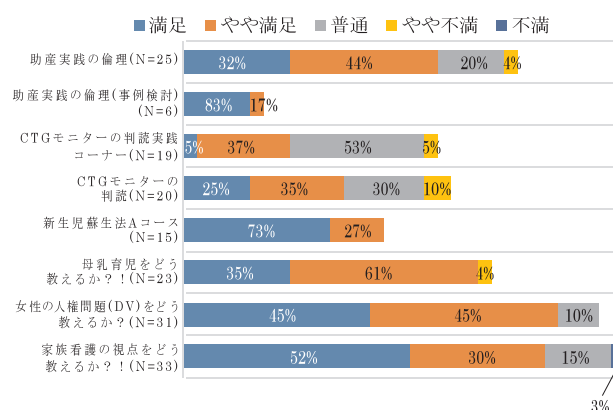
折しも学術集会2か月前の4月14日には熊本、4月16日には大分で大きな地震が発生し、開催地久留米でも長びく余震で安閑とできない日々が続きました。地震発生直後、学術集会事務局からも参加登録いただいた皆様に安否のご確認をさせて

いただきましたが、道路の寸断と復旧の遅れにより参加困難となった方1名を除き、ほとんどの皆様にご参加いただくことができました。学会は無事、開催できましたが、被災地ではいまだ十分な復興状況にありません。被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。学術集会当日集まった義援金は熊本県助産師会に寄付させていただきました。ご協力に感謝いたします。

1) 学術集会各講演等の評価 (n=162)



2) プレコンgressの評価 (n=78)



第18回日本母性看護学会学術集会 教育講演

『教えることの基本となるもの～臨床の知としての教育技術の獲得～』

藤沢市教育センター主任研究員 目黒 悟



教師教育に携わるようになって30年、看護とかわるようになってからは20年になります。この

20年間、看護の世界と教師教育の世界を行き来する中で私が確信を持ったのは、「看護」と「教育」の同形性ということ、つまり、看護と教育は同じ形をしているということです。

人と人が向き合っかかわるという意味においては、教える人と学ぶ人の関係も、看護師と患者の関係も本質は変わりません。私たちは相手のからだ全体を、自分自身のからだ全体で感じて、絶えず全身で相手にはたらき返しているわけですし、相手もこちらを全身で感じて、全身でこちらにはたらき返してきます。ですから、人と人が向き合っかかわるということは、絶えず互いに

相手を感じながら動いていて、時間の経過と共に変化していく。このような関係を「相互性」と呼びますが、教える－学ぶの関係も、看護の実践もこうした相互性の中で生まれているわけです。

皆さんが看護を教える人として、あるいは看護師として、目の前の対象に向き合っていくという意味ではこの相互性の関係の認識は極めて重要です。なぜなら、自分の目の前の対象はすでにこの私を感じて動いているわけですから、自分の見ている対象をつくり出しているのは自分かもしれないと考える必要があるからです。看護師の思い方が大事なのは、それが患者に感じ取られて、患者の言動となって自分の前に現れてくることしばしばあるからでしょうが、それは皆さんも経験的によくご存じなのではないかと思います。このように、看護の実践の中で大事なことというのは、そのまま教育の実践の中でも大事なことなのです。

「教育」という言葉の由来には諸説ありますが、現象学的教育学者のヴァン＝マーネンは、ラテン語のエデュケーレ (educere) とエデュカーレ (educare) という2つの言葉が、英語のエデュケーション (education) になったと言っています。エデュケーレは「導き出す」、エデュカーレは「導き入れる」という意味ですから、学生を今いる世界から導き出して、看護の世界へと導き入れるのが看護基礎教育だということになります。そう考えると、授業の中でただ「学生の考えを引き出す」だけでは、今いる世界ですでに考えられることや思いついたこと、あるいは知っていたことを表現してもらっただけにすぎないわけですから、そのままでは何かを学んでもらったことにはなりません。学生を看護の世界へと導き入れるためには、その考えが果たして「看護としてどうなのか」が絶えず吟味される必要があると思います。「問い返し」「ゆさぶり」「一緒に考える」など、方法はさまざまですが、まさに、このようなところにこそ、かけがえのない臨床経験を積んできた皆さんが教える人として存在する意味があるのだと思います。

私は講義・演習・臨地実習に限らず、学生に対する指導場面は、すべて「授業」であり、「教育的なかかわり」の場であると考えています。しかし、授業の一環であって然るべき母性看護学実習が(母

性領域では実習場所が不足して臨地でないものを認めざるを得ないという) 曲がり角に来ているというのは大きな問題だと思います。

このような時だからこそ、皆さんと分かち合っておきたいのが、「学ぶ」ということの本質は、自らの経験の意味づけにほかならないということです。今、ここで学生に経験されたことが、自分にとって腑に落ちる、身に染みてわかるというようにして、意味が変わる。それが何か「わかる」ようになる瞬間なのでしょう、それは経験が丸ごと変容するような事件なんだと思います。様々な形態の授業を通して、経験が変容し、成熟し、やがて発展していく。その過程にどんな具体的な援助的なかかわりができるのか、心を砕きながら一緒に連れだって歩いていくのが、「教える」ことのもっとも基本となるものなのです。

ですから、自分はこれまで看護をどのように経験してきたのか、この機会に、教える立場から自分自身の臨床経験を見つめ直してみるということも大事なことだと思います。そうして教える人としての自分を育てていくためにも、皆さんも機会があったら「授業リフレクション」*に取り組んでみてはいかがでしょうか。



※目黒悟「看護教育を拓く授業リフレクション」
(メヂカルフレンド社)

【おことわり】

この原稿は、学術集会当日の講演記録から内容を抜粋したものを目黒先生にご確認いただき、修正・加筆いただきました。

「平成28年度熊本地震からの学び」

～被災した施設の助産師の母子支援活動の中で見えてきたもの～

熊本市立熊本市市民病院 助産師 本田 菜穂子

熊本市市民病院は平成16年に総合周産期母子医療センターの指定を受け、熊本県の周産期医療の中核施設としての役割を果たしてきました。以前より建物の耐震性が問われていましたが、まさか病院の機能が停止するような地震がくるとは誰も思ってはいませんでした。

4月14日、21時26分震度7の地震発生時は夜を徹して300名以上の負傷者の救護を行い災害拠点病院としての役割を遂行したのもつかの間、翌4月16日、1時25分マグニチュード7.3 最大震度7の激しい揺れが再び襲いました。院内は一時停電、壁が落ち砂煙が舞い視界が悪い中で、全患者を非常階段を使って別棟の1階フロアへ避難させました。その後全患者の転院・退院が決定され、産科は妊婦11名を県外搬送し、褥婦5名は退院となり、涙のお見送りとなりました。

助産師はその後、他の産科施設や区役所の応援業務の傍らで、困っている母親の力になりたいという一心で『私達にできる支援は何か?』を考え院内でも活動を展開していきました。まず仮設テント内に“母と子の相談コーナー”を設置して対応、その後、隣接の職員住宅の一室での沐浴支援と24時間電話相談を開始しました。しかし利用者は1ヶ月間で66件と多くはなく、情報伝達については課題が残りました。

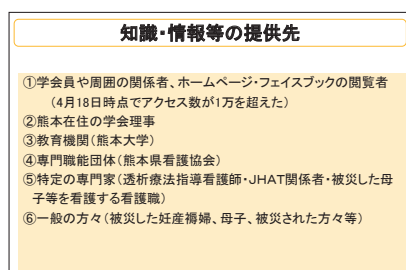
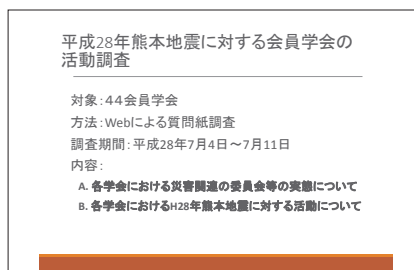
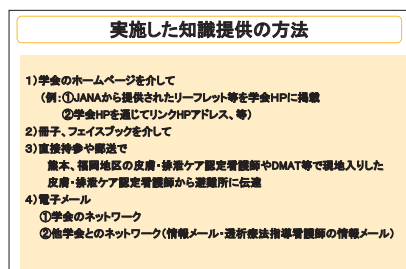
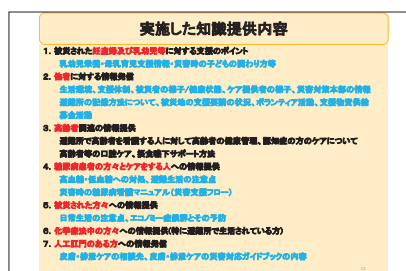
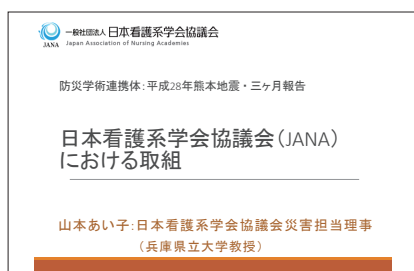
その一方で避難所巡回もしましたが、昼間の避難所に母子の姿はなく、その実態把握は困難であり、産科施設と妊産褥婦が繋がっていることが重要と感じ、当院出産の母親に電話やメールで安否確認をしました。そして、ライフラインが復旧し災害サイクルの亜急性期に入ったと思われる発災から3週間経過した頃、また改めて生活状況とニーズの把握、不安軽減の目的で電話訪問を行い、その際に震災直後の避難状況調査も一緒に行いました。この時点では自宅に居る人がほとんどでしたが、地震直後の避難場所は車中が最も多く33%、県外への避難も18%という結果でした。この電話

訪問で感じたことは、被災した母親の話をゆっくり聞くだけでも母親をエンパワーできるということ、育児上の不安を抱えながらも誰にも相談できず耐えている母親がいるということでした。この時期の顔見知りの助産師からの電話訪問は“何かあったらいつでも相談できる”という安心感につながり、その意義を実感できました。そして、母親達のエンパワー目的で開催したかった育児サークルも震災から2ヶ月後に開催することができ、19組の母子の参加がありました。久しぶりに母子の笑顔に触れ、誰よりも助産師が勇気づけられ元気になりました。

被災後、手探り状態で展開していった一連の活動の中で、災害は突然やってくると肝に銘じて平時からの備えが大事だと痛感しました。まずは人と人が繋がっていることができる工夫・仕組みづくりが必要であり、医療機関と妊産褥婦は当然ですが、医療機関同士・助産師会や看護協会・行政などの関係機関がタイムリーに情報発信や共有ができる連携体制の構築も重要です。また、他者に気兼ねなく安心して利用できる母子避難所の設置は必然ですが、今後も災害時の母子の車中泊は増えると予想されるため母子専用の駐車場スペースも確保し、周知することで母子支援が容易になると思います。それと同時に個々の防災意識を高める啓発活動も重要になってくると思います。母子手帳に防災のページを加えて産前教育から乳幼児健診に至るまでそれを活用し継続した啓発も効果的かもしれません。そして、震災後の活動の中で母親からも「母乳だったから助かった」という声を多く聞き、災害時は児の栄養面だけでなく母子の情緒の安定も図られ、平時からの母乳育児支援が助産師としての減災に向けた取り組みとして最も重要で、責務だと感じました。

今後復興に向けての長い道のりの中で、母親の心に寄り添った育児支援は益々重要になってくると思われ、これからの助産師活動に求められるところだと思います。

日本看護系学会 (JANA) における取組～熊本地震から (一部抜粋)



(出典：山本あい子：防災学術連携体熊本報告会・日本看護系学会協議会における取組 発表PPTより)

第19回日本母性看護学会 学術集会のご案内

学術集会長 町浦 美智子 (武庫川女子大学大学院看護学研究科)

この度第19回日本母性看護学会学術集会を、平成29年6月11日(日)兵庫県西宮市の武庫川女子大学中央キャンパスで開催させていただくことになりました。

メインテーマは「ライフサイクルにおけるセクシュアリティ支援 ～多様性の意識化と実践～」といたしました。セクシュアリティとは単なる性行動のみならず人間の関係性をも包含した人としての基本的な権利でもあると認識されています。母性看護学や助産学では看護実践の基本となる重要な概念でもあります。

ライフサイクルにおいて看護援助の対象となる人々はセクシュアリティに関するさまざまな課題・問題を抱えていると考えられます。しかしながら、看護職者がその課題・問題に対してどう対応したらよいかわからない場合もあるのではないのでしょうか?そこで、セクシュアリティに対する支

援も多種多様であることを意識し、個別的な支援を実践するためにはどうすればよいのか、学会にご参加いただいた皆様とともに探求していきたいと考えております。

プログラムは理事長講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、高校生向けのナーシングサイエンスカフェ等を企画しております。1日限りの学術集会ではありますが、緑多いキャンパスの中庭で一息つきながら多くの参加者が互いの交流を深め、実り多き1日となりますことを願っております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。詳細は今後ホームページ (<http://bosei19.umin.jp>) に掲載予定です。

学術集会ポスター：
<http://bosei.org/img/nenkai/jsmn19poster.pdf>
 会場地図：
<http://www.mukogawa-u.ac.jp/gakuin/access.htm>

CTG (Cardio Toco Gram) 判読スペシャリスト 養成セミナーのこれまでの成果と今後の方向性

CTG セミナー担当理事 島袋 香子



1. CTG判読スペシャリスト養成セミナー事業 の目的

日本母性看護学会は、母性看護の進歩と発展を図り、母子の健康と福祉に貢献することを目的としています。本事業はこの目的を踏まえ、分娩管理に関わる看護職への教育支援として立ち上げられました。

分娩中、常に産婦に寄り添い分娩管理を行う看護職は、胎児の状態変化を最初に察知できる立場にあり、CTGを的確に判読し、適切な対応を取ることが求められます。

日本においては、分娩中の胎児の状態を評価する方法としてCTGが広く用いられていますが、CTGの判定は検査者間で誤差が大きいこと、胎児状態を悪く判定する率が高いことが課題とされています。そのため、日本産婦人科学会周産期委員会は、不適切な帝王切開率の減少を目標に、CTGの判読・判断の標準化を試み、2008年にガイドラインを作成し、2010年と2014年に改訂を行なっています。

本事業は、周産期医療に携わる看護職が、胎児生理学の学習を基礎とし、標準化されたCTGの判読に習熟し、そのレベルを向上させ、医療チームのメンバーとして活躍できることを目標にしており、日本産婦人科学会周産期委員会の委員であり、ガイドライン作成の中心的役割を果たされている池田智明先生（三重大学）と教育内容を相談しながら展開しています。

2. CTG判読スペシャリスト養成セミナー事業 の現状と成果

CTGセミナー 1stは、CTGが的確に判読でき、適切な対応ができることを目標に、周産期領域において3年目以上の経験を持つ看護職を対象として、10時間（2日間）の研修を行なっています。セミナーでは、CTG判読を検討するグループワークが欠かせませんが、研鑽を重ねている母性専門

看護師がファシリテーターとして協力してくれています。本セミナーも2009年に第1回を開催してから2015年3月で第9回目となりました。これまで本事業に参加した看護職の数は891名であり、その内872名が認定試験に合格しています。不合格となった者でも次年度のセミナーに参加した者は、学習を深め合格をしています。これまでの認定試験の平均得点は78.8点で最高点は94点でした。認定試験の結果を総括すると、基線の判読が的確にされないことが、対応の誤りを生む結果となっています。また、レベル判定に留まり、先を予測することにつながらないことが課題となっています。そのため判読の基礎となる胎児生理学に関する学習を強化しています。しかし、セミナー参加者の学習意欲は高く、お昼休みに講師の先生方が質問者に囲まれるため、事務局メンバーがその対応に苦慮するほどです。

CTGセミナー 2ndは、ハイリスク事例の判読に対し、産婦及び胎児生理学に基づくCTG判読と予測的対応ができることを目標にしています。母性看護学会の会員でCTG 1stを修了した者を対象とし、8時間（15日）の研修会を計画しています。

第1回の立ち上げセミナーでは、幸運なことに来日中の Julian Parer 博士から直接講義を受ける機会に恵まれました。CTGセミナー 2ndの開催希望は多く聞こえてきますが、CTGセミナー 1stへの参加希望者が多く、この希望に応えることを優先しているため、なかなか第2回を開催できておりません。この点に関しては課題であると考えています。早期に再開できるよう検討しておりますので、今しばらくお待ち下さい。また、現在教育支援を行うことが精一杯の状況にありますが、教育支援の成果を明らかにすることも課題であると考えています。研修に参加した皆様には、ぜひ日本母性看護学会でCTGセミナーでの学びを活用した実践報告や研究を発表して頂ければと思います。

各分掌からのお知らせ



1. 研究促進

研究促進では、学会員の研究活動の促進を目的に活動しています。会員が申請できる助成金等の情報提供をホームページ上に掲載しております。是非ご利用ください。さらに、若手研究者や臨床で働く方の研究活動を支援する目的で、平成29年度研究助成を募集します。応募期間は平成29年1月から2月末（必着）までです。3年以上の会員歴のある方は研究代表者としてご応募できます。詳しくは、学会ホームページに掲載の募集要項をお読みいただき、是非ご応募いただきますようお願い致します。

2. 学術・教育支援

第10回日本母性看護学会学術論文賞は、学会誌第16巻1号に掲載された2論文に決定しました。

- ・西岡啓子、成田 伸：子育てをしながら不妊治療を受ける女性の体験（原著）
- ・山口典子、中村康香、跡上富美、吉沢豊予子：無精子症の診断を受けた時の思い
～精巣内精子採取術・顕微鏡下精巣内精子採取術を選択した男性の語りから～（原著）

3. 戦略的プロジェクト

日本母性看護学会は看護系学会等社会保険連合に参加し、そこを通じて母性看護実践の中から診療報酬改定要望書が作成できないか検討するために、エビデンスデータの収集と作成に向けて取り組んできました。戦略的プロジェクトはそのエビデンスデータの収集と作成を担っており、妊娠糖尿病（GDM）と妊娠高血圧症候群（PIH）の二つに焦点をあて、それぞれグループを作り活動してきました。活動の成果は、学術集会における調査研究合評や交流集会・ランチオンセミナーとしてご紹介しています。現在GDMグルー

プでは、平成30年度の診療報酬改定要望書作成に努力を続けています。

4. 第11回日本母性看護学会セミナー「周産期・育児期の糖代謝異常に強い看護職育成セミナー」開催のご報告

今年度から学術・教育支援担当、戦略的プロジェクト担当の共催で標記セミナーを開催いたしました。本セミナーは、周産期・育児期を専門とする看護職が、周産期・育児期の糖代謝異常に関わる科学的に正しい情報を獲得し、適切に支援できるようになることを目的にしています。1日目は54名、2日目は50名の受講があり、2日間受講した方に修了書を発行しました。次年度以降も開催予定ですので、今後とも関心を持って閲覧をお願いします。

対象者：テーマに関心を持つ看護職（助産師、看護師、保健師）

場 所：大阪府立大学 I-siteなんば C-2,3

日 時：平成28年11月5日（土）・6日（日）
10:00～17:00

講 師：愛媛大学の杉山隆教授、杏林大学病院高橋久子氏（糖尿病看護認定看護師、助産師）他、戦略的プロジェクトGDM班のメンバー

5. CTG判読スペシャリスト育成

CTGセミナー 1st

日時：平成29年3月4日（土）5日（日）

場所：三重大学

CTGセミナー 2nd

日時：平成29年3月5日（日）（同時開催予定）

場所：三重大学

事務局からのお知らせ

1. 平成28年度会費の支払いについて

本学会は皆様の会費で運営されております。平成28年度会費未納の方は、事務局よりお送りしている郵便振込用紙（青色払込取扱票）を用いるか、あるいは下記の口座番号へ会費の納入をお願いいたします。

年会費：8,000円

1) 郵便振込の場合（青色振込取扱票）

口座番号：00120-8-386309

加入者名：一般社団法人日本母性看護学会

2) 銀行振込の場合

ゆうちょ銀行 〇一九店

当座 0386309

口座名義：一般社団法人日本母性看護学会

2. 会員情報管理システム（SOLTI）への情報更新のお願い

ご連絡先・ご住所等が変更された会員の皆様は、本システムより情報更新をお願いします。

学会公式ホームページ【会員情報照会・更新】

会員ID（会員番号）とパスワードを入力の上、ログインし、情報の更新をお願い申し上げます。

3. 第19回日本母性看護学会学術集会

日時：2017年6月11日（日）

会場：武庫川女子大学中央キャンパス
（兵庫県西宮市池開町6-46）

テーマ：ライフサイクルにおける セクシュアリティ支援
～多様性の意識化と実践～

学術集会長：町浦美智子



編集後記

2016年度も、熊本地震をはじめ台風による災害が、人びとの暮らしや健康に大きな影響を残しております。どこかで日常的に起きているこの事象に、減災意識（自助）や起きた時の公助、共助を一層に考える機会を頂いたと思います。日本母性看護学会も会員学会となっているJANA（日本看護系学会協議会）のWebも活用しましょう。

また、海外とも距離が近づいただけに、テロやジカウイルス感染等あらゆる危険が身近にあります。自分自身を守ると同時に、専門職として教育や予防活動、さらには遭遇してしまった時の対応など学会活動を通じて、知識やスキルを獲得できるよう尽力しましょう。
（広報担当理事 遠藤俊子）

発行人：森 恵美

発行日：2016年12月5日

広報担当：遠藤俊子、松原まなみ、常田裕子

発行：一般社団法人日本母性看護学会

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-1

第2ユニオンビル4階 株式会社ガリレオ

学会業務情報化センター内

一般社団法人日本母性看護学会事務局

Tel：03-5981-9824 Fax：03-5981-9852

E-mail：go31jsmn-mng@ml.gakkai.ne.jp